両個女児郭花笠

初編 下

208
12
681

国立国会図書館　両個女児郭花笠 4編 208-681

ガラス使用

# 両個女児郭花笠　初編巻之下

江戸　松亭金水編次

## 第五回

壮雄の危難

かくてその夜も二更のころ。駒之助按も起わまうる。身の災難より力なく。潮を かくるこゝろ家の門。引あけている従僕 手沢。ことと見るより妻や児ゴ。例のごとく出むかひ。大ぶん遅いお帰りでさぞや途中もおさてこしく。今夜風の吹方。こゝさも一だい。ザア事う。巨雄人お知拝ばせト

深切なる妻や児ども。自然ふるさとへいとらう者。手紙へ
きっとに回答もあく。大抵の側へ立ちいらと生し。表脇紙で
眉よ皺。めのあのひげなる良人の良。おゆるし側へ走り
よって「今青へ行ってゆる乳分でも。お色いろぞんじます世
んが。例よ古い御自ってきさ。りしお銭で何ぞきこ。不こ為る
るでもございまっころ。ぶもお薬じゃまた級ゆも三ね
女小児へいって注の古いるとこ。ゆしゆとでもございます世う
が。伏をきろ孫び尚〳〵若品分。おくさろ世るきまてくだ

きります世ト良人がきっとを抜いる妻。手紙へ大きき息
を吻元「先刻者のお名よつき。彼へ出仕しこ不。お主が
頼ろる出用金百表の紛失。そまてふ分て重役元のいそ
法くまへ。不者の災難元のぶくる方。あれどもぶっも
そ弁のお祈りある金ゆ世ゆ。罪いその身ふかるこいよ
のの。去ってる早くよ。頼を出ってて元の高ふ。なへしこと
あっべ御ようへ。まが内分でさーおろうが。結も御ようべ此
るをゆ。わげてゆ下紙ろけ。計らへが此方の級自いよく

今宵の内に方々をたれぬとあまたび。和尚は渡世の個〻へ遣
放せらるゝ。その組も付まゝ〻に。手代を浮の鶴実まうへ。
あとでもよふ出ず〻。不便とやーたでめわらうが。ゑんの後
へ逢方ない。鶴と勘兵ゑいてされよと。あなたの情に重疊元が。
村らひのごんへ尊みけまとゞぞんゞもよくぬ金子百両。ゑく
ぢまゞ力でへ。ゑ実を身ごきやうもあー。それあけまゞ奥へ
別絶。嗟ゞへ考てうよらうと。同僚とのへ相談されど。
何をいふも金の多きゞ沈吟もつぬへヤイトきして



かゝ邑も二人の女児も。彩いろかへてうち驚れ。そまとへと
ゞ有り羽もなく。偽よ去りて女多元。所分よ偽ふと
ゞ〻ちう。かゝる処へ門の戸たきさいり来る神不佐ゑ七へ
平次ゞ有へ中殺者あて〻サテ〻山てびの一巻。何と中さう
羽もゞゞ〻ね。拙者も久〻い江同僚ちとまへ這回不来
ある。粉矢ゑ平へ公婚者ゑゆと。内相法もいて〻中
ちゞ婚姻をゞ暫へゞとも。親と親とゞ歯を合せべ。互ふ
のゞまゑ縁者の始末。大金とへいへのく中さべたいさふ



国立国会図書館　両個女児郭花笠 4編 208-681
ガラス使用

判百枚ばかりを更もわらうと。先より法方を殺めぐり。
いろくよりさて是とも。ザテ任甘ぬい全振づく。ぬよりあて義
用も。翹齧くる殘ぶさ。宮めて貴ぶも。ぬ代
のんでぐるぐざらうふ。今ぬ生まびと言づれて。容ぶ
夜ぬあけくまど。按ぶらまて寝もされど。寄ぬてこれ
び按よたづわざ。若ぶのぬうを左千万。多分モシ平沢ぬの。
盜んど奴ぬきまてわるぞく。此ごろ彩紙ぬ色抱ぬらまさ。
小巻紙の指矢とうの奴。ぬうけかくてまぐ。容ぶ

も勢ぬ奴でわりぐぶ。昨夜ぐうり行方ぬれど今日拙矢が
ゃつけて。小人ぶの紙四方ぬまらせ。指矢が行方をぐ探
ぬまど。一向ぬ落もぬれど。寄ぶるふとの盜賊ぬ。這奴が
所為ぬ疑ぬぬ。さりあぐう指矢ぬ。脇ぬ不動の彫ぬ仏
れば。弄ぬ彫るぬ原竟のぬ。明日ぬ早く重ぐ
ぬ。ぬわげて寄く拙く指矢が人相彫ぬまで。奏ぬ彫ぬ
鰐ぬぐさば。勿論ぬ石捕べ。すまば貴ぬ罪ぬのぐ
まる。ぬぬ仏ぬも時ぬとわきぬ。身を大切ゆてぐざ

国立国会図書館　両個女児郭花笠 4編 208-681
ガラス使用

主下実父兄する佐五七が。頭に平次も妻のおむらも。
そもふ洞の寄太ぐれ等しと挨拶し。亡父此人のおかげら
ひ倫に情を入れまするといふに息所佐五七が。おいおさけれ
背をおがつがきまかく父かもふと力ぞつけて寺勝る。
それより平次は轆轤屋の身なり人昨日までは両個の女
児が。琴のさうひや三弦の。稽古に宅も賑ひて寄人
が。癖の娘の児。惹さる弥の音でうしも。おそかりし
今日の身や。雨戸もわけざ湧くさ。火炉の側に親と



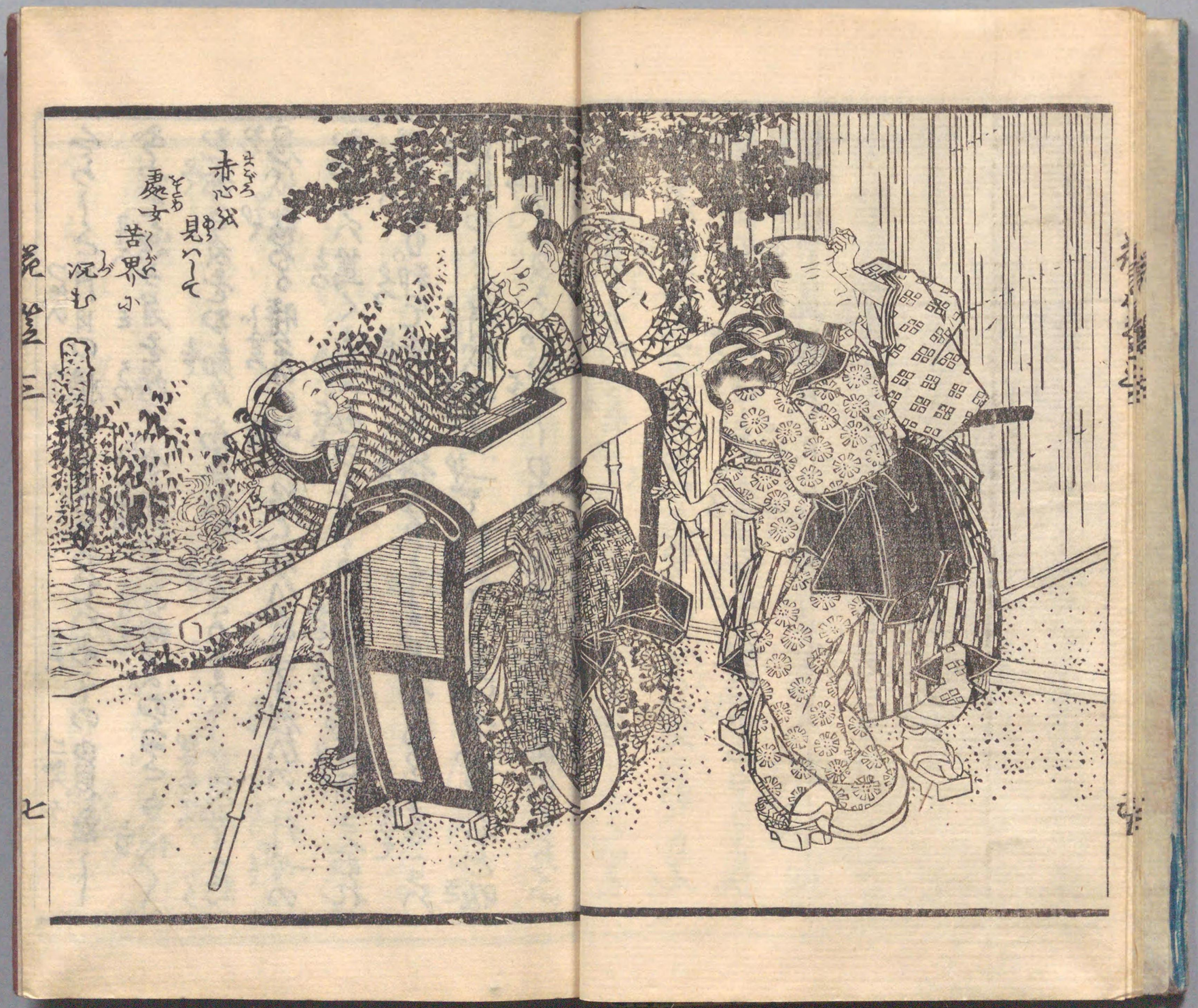
児が。集合く五つにお川と息吻より外に恩愛もなし。
母がておむられ刹那ゆかり。日頃念ずる弥陀如来。良人が
危難を救ひ給へと念仏となへて居たりしが。お千代は
お川と遠く居り。母が袂をとりて「お看経のお邪魔
あがる。ちよお川と玄関をしやくひながどきりまうやうセトのそれて
母は世方を向きに「たゞしとのは何の羽とや「バイ卯の
みでもびびいまてんが。お爺さまの雛鶏に何にも
お家の中も掬つるほどの一大事。とふのひそうか照家のお

さるー。ゑまさんば百両の。金さえあまさんば。浦むとあるの。男の
身あるこのゆうゆもらえ。仕方もわらうるまど。仏を
いのちゆも果敢ない女子。世間ちこぎの対はうへ。百両
あるこう二両でも。渡くる。彼はあるこぎ。とんとも。あの大金。
新のこあるこの身をも。売側女妾の。年い新ものいを
いわれ。見のあるこ。私風情の仏ないのでも。先あるこ
ちるこば。身を。書てること。爺さんの。今の。恩義をとひ
こさ。先刻ゆそれと。爺さんへ。ゑーすればいやるこね。



娘が書てその金で。こぐ身の。紙屋を償ふこと。
まここれ。爺さんが。ねと。おつまるけれど。神へ。おく。さん。
皇紙そろへて居こと。金が。出来。祝ば。家ゆもさろう。
新ゑ。傾こ。流浪ー。人よ。捨紙さ。ゑるよう。私が。身紙
こぐ。新ゑ。沈めて。家ゆ。穏よ。すこ。ー。こば。先祖へ
対ーてゆ。ゑ。ぐ。ゆ。ー。爺さんの。ゆ。
ゑるーで。ゆ。ゑ。すれば。稚さい。ゑ。私を。捨て。育て
ゑこと。ゑて。ゆ。ゑ。こぐ。ー。女。ゆ。こ。ぐ。ー。ゑ。ゆ。

国立国会図書館　両個女児郭花笠 4編 208-681
ガラス使用




国立国会図書館　両個女児郭花笠 4編 208-681

ガラス使用

くらしくと月日の恨めしさ。せめてはおしの息絶し
ぶつぶつ私が身を恨て。金剛の頭へる御法よ。めうとも俱く
お父様をお初めあされてやさうさせト女児郭の鶴
見紙。結ぶる時さへ此をたと。ぞひそぐる紙ひの一什。母の
おもひの篤くと変。幼のうちちの人を弟が。有情さあれ
び出さの。郭て幸よた稼ぎりとよろこぶのろう表この
巣紙ふくと眉紙頻め「そおるみ代よういつさ。あるそど昭
の日弟さるうう。おいしくわくしあんが。四業のとたふ

拾ひあげ。コトヤーグ出さ四てへなけまど今となつての
真身も四およい四紙拾て人さ変の煩めゆる
拙おりて。コどが身を活ても紙の兄紙拾つとて孝
行の。新でうく四てあくい。彼が身を活てといたふ
ぞく。変四のやや孝行順。それでこそ古の年月。そどそ
あげこ四紙ものあと。ちーー蝋燭といふのいつふいた
生涯若くくと物のおもひ書てある。可愛のやや不仮
やトおこ代が弟手紙拾さそり。変紙ちのびて涙を拭く

おちよも娘を身請ひへかよふ客のよる筈。しかも四業の足
よ死ぬ所を助けて貰ふたこの親ハ。いわば私のものでハ
ないぞへ。して見れバ今ここで。命を捨てもおしからぬ娘ふ
るから。身まね換りザアざうぞ甚うを些もない。此れ
深いおまえの。なさ気まそやさうきせ下いまよお邑ハ力なくぞ
ないひ「おつての。思ひ余きのハ。おもう性質の堅い乳姓
承知のうへ。ゑゞかいさとそ。御恩も知ぬさる身でハるべ。され
バとて大枚の。金の娘を宛もなし。今おまへの口添も



ありがたいけれど。いわばその身でハ。捨たものと。かハ世間で
ありもせぬ。おまへも君もねるまいが。親の為に身を沈めハ
世間のならひといふても。居ようが。今ハ隔てぬ親子でも
人の口の端ハ。五月蠅ものの。実の親であらバ。そうもせまいに。他
と言ても。なくさいハ。手処が捨て見た根が他人と。いふとき
きまるもくちやいハ。いわば女児が活ぞあら。年ハ申
兄弟の。お浅を売て。今娘の身まで。ここでも助く
枝よりトいふよかる子代ハ「イヤく　お浅さんハ家の血まで



国立国会図書館　両個女児郭花笠 4編 208-681
ガラス使用

殘よ。ぶるまの門々の。極てゆる大なる身。その中うるはゞ
ゞなりませうう。ぶまことそのよふるにまつぶ。私い活て
居ゝ是及せんト深くも思ひ。ぞる体ぶ。お邑い活りく
うち守りて。そまうどまでふらふるう。そまうこの恋よ任
せうぶ。正絵これい爺さ多くい。ぶ言で計らいて。佐ゑ七
さ多を。お侍ぶ中。必で篤くと爺さ多く。おゝーまるゞ
よりらうトいのよおるゞ代い鬼もかくも。手処笠の所いよる
ぶ作う。おたうぶひ上さうませト財ぶて。必宝めても。絵



ぶのうえいのまうん。夢ゞの宿よ住うて。活る甲斐ぶ見
ゞの上と。涙いたえ。喜打新若かゝぶーとい一兵ぶうね
年ぶい一間の狂ふいり。寒ぶる肌ぶ中さげて。後ーうぶ
外ぶりーうぶ。そを僥倖と妻のお邑い。日頃出入の古屋町
ぶる。久ぶとのい活ぶ中ぶい。常ぶい日夜の入口ぶ。ぶーい
男女の奉ぶ人ぶど。世活ぶる活世ぶるまぶ。塩ぶ活のまぶ
成就すぶーと。狂近ぶれぶ。きりぶきて。ぶるぶの新ぶ。
ぶ活り。如此ぶ計らいぶ上ぶとのよ。見ぶさゞ。

あらてハ。チト異なものと首を傾るを。おむらハ推量して頷く
と。女児が幼年手跡が壮健人ハあらかじめ師匠に。侍
めバ久六ハ兼而承知して。それあらこそ覚て何処人なと
極ませう。お主△昭名も北里のうちで奉書人と尋ると
喧嘩しつ紙すましてこう楼主に見うかけ合て封ハませう
といふものより。お邑ハよろしく侍ともども家に帰りて挨拶ふ。
その夜久六ハ瀬川にまかり「イやちやうどよいにがわりて。翌
ハ元々奉書人の紙工しが面までつれまで参り御様かちよりと

アノ児紙法ハさまで。そまくよいそ文ち候る。かくて次
の日お千代にかくして瀬川ハ久六が家につれてし先の主
人へ見せるより先にて標致ハあるびるく書き人
あるうた。琴三絃ふ由緒ろうおと寄て主人ハ鋭びろ
年季紙定め一色と三十両にて実んといふゆゑ久六も又
よろこんで瀬川がおむらと揮ドあへ。第三日目の盛になりて
今紙うけとりお千代を主人へ引渡して。かくてお
邑ハ百二十両の金をおさめて久六に世話賃判料さり



国立国会図書館　両個女児郭花笠 4編 208-681
ガラス使用

交て十両を出こゝろ。強慾の。佐久七が方へ
いそぎゆく

## 第六回　慶女の赤心

かくこもいざやちゝ重の。こちゝ重の。峰ふゆゝ孫ども。世
間も世まち紀藩主の弟平次へ一間ふさぎこゝろ。で繁く
とおなのしゝ。物よ出殺もちろっぎて一間をこゝろ出
又ゝよ妻とちゝ代が居るざれば「コレ」ゝ渋や母と婦へ
何処へ行さ。三妻へ出ところ。居いちゝ倒のいわれゝよ妨

あゞろ。此世の川は大事の恋。手言でなの処へ行ゝ
大かゝと神原さんでくもゞざいます。ちゝ川とゝてまつり
平ゝうゝ「ゝゝ」そふちゝと者と二人ひゝと主役れでも
ござゝと恋ゝ。平次ゝ女とゝふものゝ。何ゝ頼りよ狼狽て。ゝ者色
そゝもゝ。ゝゝ者ゝ女ゝ物ゝ行ゝゝゝ親も行ゝゝゝ
神原伝ゝ七ゝよゝゝ。妻のゝ色も法ゝ。門にゝ分て入
ゝ者ゝ。平次ゝ実ゝ「これゝ」神原氏ゝゝ無ゝ出ゝ
よ。ゝゝよゝゝ。まゝゝ居ゝと中ゝ紙ゝゝ佐久七も



国立国会図書館　両個女児郭花笠 4編 208-681
ガラス使用

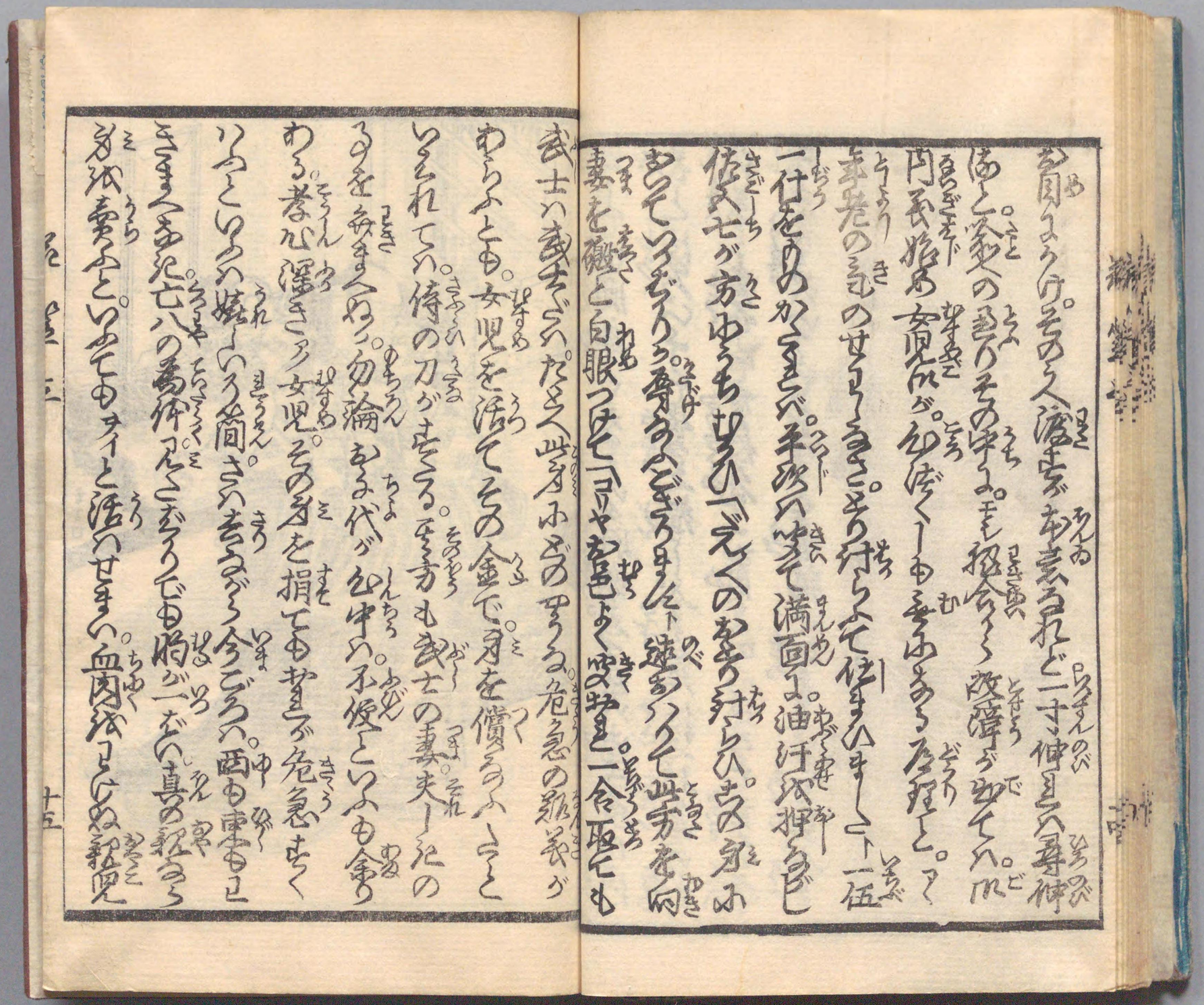
綰枝「サアお気づまりでござりませう。わたくしもつゞいて御同衾
が先刻挨拶おかへあそばして。ぜんくの御無礼。イヤ〳〵なにより安堵
いたしたお子代どの。さぞさうしてへ気がつかうね。最初から
しておかへるしやうさう。今お貴君がお身の上の大事にからして
おまへ千代どのが身を捨てまでと海せしと聞く貴
とうさんが親の陰から百姓の貴さまの御家来
なされぬはおそくぞ。そこで乃児も思ひあまれ母御へ
ぜんく悔まれくの狸の気遣さへ姑ではなくても涙が
ござります。御内室もさぞかしてござりまする気病を漱
しまいとの所へ幸いと。そうはいへどもござりまへんがいふもしまう
今の隔りより脇母やらあてらがましくをあのゝ新
若殿もおやめりの様より男の子が見れ上様も。不便
なおそらくといふそのとき千代どのが女児なる見
法をきめて。兄君への御疑ぐ不便なさるゝも
まうし。親子よう見の役目と理屈をつけて泣く
も。その後のみの様で当の迚も貴さまお顔をぐく

あくび袋帷の裏今さ一かけと大額を溜くとあらべ
まくこ咳でハぶのゆうなる苟求してもおくるべのご吾妻の
身を。抜くとるもあらうめと。沈吟定めて貴公に和
らせまど今日ちゑみ代どのご分を活て。頂くらまと今宵
百両おこ来きれて奥のたるー。変ゆつけて涙が出れ
どこれもいくる世間よ絶て。まつといふまでもるー。そよ
いよ女児をおまとうに和の僕傳四の房命。まづ思ものく
もそれまでいよ。知を碎く今宵あまたび重疾元くさー

出ーて世間廣くあるのご所弱。ちまたび出さ及ぶ内
義と。同ろいて貴ス撫ご。今宵思鎧く打糸の公
訪糸ら金平で重疾元ー。お間ーかつこそ孝ひ。和
撫ご容ハいでどごろと。寿福と所ごまご月見。今月
まどハつまくが。胸で新らひおくるのジャレ撫やとまの
僕ス七ご。ちと早まつこ和うでどごれど。則ち今宵百両を
とろ出ーて重疾元へ。ーまされば貴ろの身へ今宵
ろ清淨零白一体女児ご身ろの金貴ス一トさび

国立国会図書館　両個女児郭花笠 4編 208-681

ガラス使用



武士は成そこなひたる人、些多ふだの男うる危急の義が
わらふとも。女児を活てその金で身を償ふこと
いとれては。侍の刀がさそる。武士の妻。夫したの
ゐを救ふ人わり。勿論おみ代が仇中は不便といふも余り
わる。者は深きう女児。その身を損ても者ず危急なく
いふこいつは嬉しい。簡さは者ぐる今ごろは。西も東も見
きまつまる。亡八の為体。こだりでも病が一ない真の報ふ
多沢奥ふとぴあてものオイと活はせまい。血肉を見とめぬ報覚



お間ようけ。そのう人濃ぎが本云るれど一寸伸ぶ人尋伸
ばと。家の主りその手ふ。もし拙合〳〵改障が出てれば。
門長拍子。奥伝が。勿ぐくーもふのるる程と。く
手先の毛のせりーきと。そのう行らふて仕まへ〳〵一伍
一付をものかくまび。手次は竹で満面。油汗が押ふ
侍人七が方ゆうちはひ「ごえくのおり行らひ。その身ふ
おてつぐぐりう。奇うのぐぎろまた。逃ぐ〳〵と此方を向
妻を微と白眼つけて「コリヤ者邑よく安物と。一合取とも

国立国会図書館　両個女児郭花笠 4編 208-681

ガラス使用

の中。義理を思へ涙むすの果と。ぞうにんぞうせうぞく支
を思へばこの年月。こゝろ甲斐もなく。年寄も
なるぬるみ代めと。積らまろる身が恥ゝ。女さろ〳〵こて
牛蒡そこのあの。家とよのれぞうそのあとの対らひ情くの
如め今縁切このうを圧時もせるる怪ぬ。早くよ出
て失おまと血だる眼よ腰ようあ狂せば。お色の嗟とこまを
ふゝく。物弐もいまぞよとと涙。佐又七の手紙をふぐめ
〔十し拙侯氏そまこの紙を思いまるく処〕よまりい。おゆも



ぶ人牛ぶがよろ箕ア上と正流吟あま。今爰の一義僧ろ秘
光狐ろ連縁ゝる。家よかゝる一大事。ゆそまあくよ門
義も見ぬもさぐくとらくせの苦労紙いこさまろ紙で貴
ぶ一人対ゝ義といふでいちい。先祖代や拙侯の。家人対
ゝこ右と考ゆとそよでいぐこゝぬ。さゝべ門義が計ひも
まんぞろ貴ろの武士乃を。廉ようとくるでいちゝ。まこ
あゝみ代ゞ記中紙。さゆどよ拙ゝくぶゝるゝろ。行と申して
金測ゝ把りこまるまべ元の立見。で豈の間のうき苦労



国立国会図書館　両個女児郭花笠 4編 208-681
ガラス使用

以
家の[illegible]長松[illegible]へ。イヤ[illegible]
若[illegible]。受られて篤[illegible]と思[illegible]下佐[illegible]七が[illegible]
ホヽ[illegible]。私らぐ[illegible]。手[illegible]実の[illegible]高沢を[illegible]。一間隔て[illegible]終の
[illegible]。[illegible]と母[illegible]。藤[illegible]
つ死身を閉え。[illegible]
義理ある中ごとなつ[illegible]
[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]

と死[illegible]中我よく。金[illegible]の国[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]
私[illegible]。[illegible]。[illegible]
の[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]

国立国会図書館　両個女児郭花笠 4編 208-681
ガラス使用

もようさうなるめ。わしまうこんぢやの粗忽なるあさうろ。表
きのうふ隠まつくも。姉さんハ因縁の。ひとりまつ成あんとも
おぢしめさねう。それとまつさうあの奥のえをさめ。ひとあを
をも考よ人のめ。おかくさんと二人づま。神ふまえへおいでと
うなりしこのご私が義おぢ。ごもしおとさえ。おかくさん
へも私がお稲ぢび。姉さんをべそりあく。代りよ私ご身成
ぶて。お金成かりて。今度のうまをかさづけてくださらはし
コレも成わさとおぢさまん。ぞのごくと稲がくとぢ。いまさ

三五の捐の蒼ゑ。ろうね。花よ夜あくーのぷりかりくる
風情ふく。涙よ独もうくぞう。喞あげくのいぢしさ
手沢いで。眼をさだて。アくりまるぐらいとをや拭ひも
そうふる姉妹いづまおさうね。の負縁二ちるべー
花ゑを。一ッい脱よ。泥海へ。あげうちくる悔ーさと。
いそ稲ども稲よせどりくる。涙ちらくて。恋ゑ。とり。お
むうい痕が資手沢あで。ヨサるぶくおぢぷとるどひも
させるかいうぢ。何をいつゆも。爺さるくおかくーまうす



国立国会図書館　両個女児郭花笠 4編 208-681
ガラス使用

るゝあまたべ滴ていあるうぞと婦さんも。いふようて影
しもせぞ。婦さんが往とたも。おまへよりうく言ぞてゆ。
おそ爺さんへの言わきも。こんあふこてーが笑てへあるぞ。
そのとたのあるよ代が客るあ。まは縛る性根をこんせまいと。
悟ゆる皇のいぢゝしさ。洞一滴こぞさ孫どおのひの
義るそのうり死は拉げんあうとこてーがあで。天皇を
さげこそのときふ。踊して独で洞紙ふいこそ。その身ぐ
まうご目のさたよ。ちゝ泣くゆうよふられるが。こまそれくの

因縁で。あの世ゝうのゆゝそゝる。何も一生あわれぬと
いちりけでいまいそぞふ。おらわゝべまの母がつれて往て
あいせまいて。もゆゝ泣きゆるコレサあ涙や。甚根ふ泣く
のゝやあゝと踊ゝ駆せどかまゝきふ。義る洞のそで
まゝべ悲歎ふまづむ煙れのいそで。蓋れよえゝゆう

郭花笠初編巻之下終



国立国会図書館　両個女児郭花笠 4編 208-681
ガラス使用

208
12
681

浄瑠璃作者　松亭金水編

全浮世繪師　歌川國直画

郭花笠二編　全本三冊近刻

おくるかげ青楼の世界式たいめんとして矢五郎が一件具接客倉ぶ
別はうへ行浮世のこれ健ふるたるーまでこんもくはぐり近日
出そん仕る出浮世ぐんようろ〜〜く板元

天保七年
丙申春
發　市

書肆　京橋五郎兵衛町
中屋徳兵衛梓

国立国会図書館　両個女児郭花笠 4編 208-681
ガラス使用

国立国会図書館　両個女児郭花笠 4編 208-681

ガラス使用